様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２８１０

研究課題名（和文）日本語多読指導が日本語指導を必要とする児童生徒に与える影響に関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical Research on the Effects of Extensive Reading in Japanese on Students Who Need Studying Japanese

研究代表者
松井　孝彦（MATSUI, takahiko）

愛知教育大学・教育実践研究科・講師

研究者番号：２０７５８３８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本語指導を必要とする児童に対して、日本語指導の一環として授業内における日本語の多読活動を行った。
多読用図書として絵本や児童用図書を選定し、授業開始時の10分間で本を読ませるという実践方法をとった。愛知県内の小学校3校で実践をした結果、図書の選定及び実践方法ともに、児童に対する継続的な日本語指導として適切であった。
日本語の能力に関しては、読む速さの向上、語彙の習得、読書感想の記述量の増加が観察された。さらに、日本語を読むことに対する不安感が軽減した様子が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多読実践は、継続的な日本語指導としての手段の一つであり、またその効果も期待できる。しかし、日本の小学校における実践報告や実証研究の例はほとんど見られず、実際に実践をする際の教材もまだ十分に整備されていない。これらのことから、「外国人児童を対象とした多読用図書の選定の仕方」「小学校における取り出し授業内で行う継続的な多読実践の実践手順の提示」「実際の効果及び実践から得られた教育的示唆」の3点において本実践にはその意義があると考える。本研究の成果により児童を対象とした日本語多読の活性化を図ることができ、また、継続的な日本語指導法に対して示唆を与えることができると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop the method of in-class extensive reading in Japanese for students who need studying Japanese and to investigate the effects of it.
A total of 449 books were used. All books except 3 novels were picture books and most of them were for children between ages zero and seven. Students chose a book during recess or at the beginning of the class and started to read it wherever they like. After 10 minutes from the start time of the class they stopped reading and wrote a small comment about the book. This method proved suitable for continuous Japanese learning at 3 elementary schools in Aichi Prefecture.
On Japanese language proficiency, this method improved students' reading speed, promoted vocabulary acquisition, and increased the total amount of book reports. In addition, interesting picture books and enjoyable reading experiences seemed to promote a positive attitude and the growth of motivation toward Japanese reading.

研究分野：外国語教育

キーワード：日本語教育　教授法・カリキュラム　多読活動

１．研究開始当初の背景

学校教育法施行規則が改正され、文部科学省告示が施行された平成 26 年 4 月 1 日から日本語指導は特別の教育課程に位置づけられた。研究代表者の勤務校のある愛知県は日本語指導が必要な外国人児童生徒が全国で最も多い地区であり、多くの小中学校において教室内外で日本語指導を受けている児童生徒の姿を目にすることができた。しかし、日本語指導が特別の教育課題に位置付けられた後も、教室外における取り出し授業では国語の漢字ドリルや算数の文章問題に取り組ませたり、教室で学習した内容の補充学習をさせたりするといった指導が行われていることが多かった。

その姿を見ながら、外国籍の児童生徒に対する継続的な日本語指導の必要性を感じた筆者らは、それまで中学・高校・大学の教育現場で取り組んできた英語多読活動が、外国籍の小中学生の日本語指導にも活用できるのではないかと考えた。

２．研究の目的

多読とは、言語のインプット量の不足を補うために行われる学習活動である。そして、学習者の言語能力よりも低いレベルの本を、母語に訳さずに、楽しみながら大量に読み進めることをその特徴とする。

国内外で行われた英語多読及び日本語多読の効果は多くの先行研究で報告されている。それらをまとめると、英語や日本語を読む力の向上、語彙の習得や文法への習熟、表現力の向上、第二言語を読むことに対する情意面の変化や動機づけの向上となる。これらの効果は、教室外でその言語が日常的に使用されるような第二言語環境（例：日本で外国籍の子供が日本語を学ぶ環境）であっても、その言語が外国語として学習される環境（例：日本で日本の中高生が英語を学ぶ環境）であっても、それぞれ同様に見られることが多い。また、多読を授業内のみで行う方法、授業外のみで行う方法、授業内と授業外の両方とも行う方法のどの場合においても、同様の効果が得られたことが報告されている。

しかし、粟野他(2012)で報告をされている日本語多読の実践例や、熊田・鈴木(2015)で報告をされている実証例を参照してみても、小中学校における日本語指導を必要とする児童生徒を対象とした例は観られなかった。

そこで、本研究では、小学生に対する取り出し授業内で行う日本語多読の実践方法を確立し、実践した上で、以下の 2 点について調査することを目的とした。

○　小中学生の日本語能力の変化及び日本語の読みに対する情意面の変化。

○　多読用図書の難易度に関する基準の設定と図書の選定及び多読用図書リストの作成。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下のような方法を用いることとする。

(1)　小中学生の日本語能力の変化及び日本語の読みに対する情意面の変化

実証事例及び実践事例のない小中学生に対する日本語多読の効果を調査するために、まず取り出し授業内で行う日本語多読の実践方法を考える。次に、その方法にて一定期間に渡り多読を実践し、日本語能力として「Reading 力(読解力)」「速読力」「語彙習得」に関する変化を、また日本語の読みに対する情意面の変化を、それぞれ明らかにする。そのために、能力測定のためのテスト及び情意面を問うアンケートを作成する。

(2)　多読用図書の難易度に関する基準の設定と図書の選定及び多読用図書リストの作成

学習者が自分の言語能力で読むことが可能な本を素早く選ぶことができれば、多読活動が促進される。その結果、学習者の日本語能力が高まり、日本語を読む際の不安感が軽減させることになる。そのために、まず多読用図書の難易度設定の方法を考える。そして、その結果を踏まえて市販されている図書を分析し、多読用図書の選定を行う。最後に、実際に図書を読んでいる小中学生から難易度に関する感想を得ながら基準を精査し、図書リストを作成する。

４．研究成果

愛知県内の小学校 3 校にて日本語多読を実践することができた。実践期間はそれぞれ 1 年 6 ヶ月、1 年 1 ヶ月、7 ヶ月であった。また、多読活動に取り組んだ児童の数は、読書量及び回数に差はあるものの、それぞれの学校で 10 名、36 名、12 名であった。これらの学校での実践による成果を、以下にまとめていくこととする。

(1)　取り出し授業内で行う日本語多読の実践方法と、実践して得られた教育的示唆

取り出し授業では，外国人児童一人一人の実態に応じて教科補充学習が行われ、教科書を用いて日本語の学習言語を身に付けさせている。また、取り出し授業が行われる回数は児童により異なる。そのため、取り出し授業の学習に影響を与えない程度の時間で実施が可能な多読実践を行う必要がある。そこで、毎授業内での「10 分間の持続的読書」を行おうと考えた。その手順は以下の通りである。

①　休憩時間中に取り出し授業の行われる教室に来たところで、児童自身に読みたい本を選ばせる。

②　教室内の好きな場所で本を読ませる。

③　一冊読み終えたところで、感想用紙に簡単な感想を書かせる。
④　本を返却させ、新しい本を選ばせる(以降②から④までを繰り返す)。
⑤　始業後 10 分経過したところで、教員が終了の合図を出す。
⑥　児童に、読んでいた本のページ数を記録させ、読み終えたところまでの感想を書かせる。
⑦　感想用紙を保存用フォルダ(市販のフォトアルバム)に片付けさせ、本を返却させる。

取り出し授業の担当教員からこの方法で日本語多読を行うことは可能であったという意見を得ることができた。

多読を実践した取り出し授業の担当教員からは、さらに以下のような意見を得ることができた。これらは、今後の授業内 10 分間多読をより効果的に行うための示唆となると考える。

○　本を読ませるときには音読でも黙読でもよい。来日してすぐの児童には、絵本の絵を見ながら会話を通して内容を理解させるというインタラクティブな読み聞かせをするとよい。
○　感想用紙に感想を書かせる際には、最初からあまり多く書くことを要求せず、児童が読書を楽しみ始めたところで段階を追って感想の書き方指導をするとよい(後述(3)を参照)。
○　読書中に語の意味について質問をされた場合、その場ですぐに教えるとよい。そうすることで、児童が言葉の理解に多くの不安を感じることなく、読書に集中することができる。
○　10 分間多読の時間を確保するため、児童の学級担任と取り出し授業内で行う教科補充学習の課題とその量について相談する必要がある。取り出し授業における学習内容が、児童の在籍学級の学習内容よりも先行している学校では、教科補充学習も 10 分間多読も毎回確実に行うことができたとのことであった。

(2)　日本語能力としての「Reading 力(読解力)」「速読力」「語彙習得」に関する変化

結論としては、観察と感想用紙の分析から「速読力」「語彙習得」には効果があったと考えられたが、「Reading 力(読解力)」に関しては期間中に測定ができなかった。

これらに関しては、当初文章問題のテストと語彙習得テストを用いて測定することを考えていた。しかし、これらのテストの試案が平成 29 年度に完成したがテストに取り組んだ児童の数が極めて少なかったことと、その試案を改良した改訂版のテストの完成が研究最終年度となったため、多読実践をする前の児童の能力を測定することができなかった。多読実践の前後にテストを行うことによって変化を測定することは、今後の課題となる。

しかし、取り出し授業担当教員から、児童の読書の様子を毎時間観察する中で音読の流暢さに顕著な変化が見られたという報告を得た。また、担当教員が児童の読書ペースが速くなったことに気付いたため、読後に本の内容を確認したところ児童は内容を理解できていたという報告も受けた。これらのことから、理解をともなった読書の速度が速まったのではないかと考えた。

語彙習得に関しては、児童との日常での対話と感想用紙の記述から多読の効果があったのではないかと考えられた。児童が読書中に本の中の言葉である「いじわる」「(あなを) ほって」という意味を担当教員から教えてもらった後、日常の会話の中でそれらの語彙を児童が使う様子を観察することができたという報告を得た。また、感想用紙の記述を経時的に分析することにより、読んだ本の中で使用されている語彙を用いて感想を書くようになったことが分かった。児童は感想を書く際に本を読み返すことはないとの報告を受けていたため、読書後に記憶に残っている語彙を用いて感想を書いたのではないかと推測された。これらのことから、多読を通して習得された語彙があったと考えた。

(3)　日本語能力としての「書くこと」に関する変化

課題の申請時には分析対象としていなかったが、本研究期間で最も顕著な変化が児童の感想の記述量であった。これは、担当教員の指導による影響が大きいと考えられた。

児童は、最初は「おもしろかった」「たのしかった」「かなしかった」といった短い感想を書いていた。そして、児童が読書を楽しむようになって以降、担当教員が「何が楽しかったのかな」「面白かったところを詳しく教えてくれるかな」と声をかけるようにしたところ、児童は「理由＋感想」といった形式で感想を書くようになった。さらに、強く印象に残った場面を詳しく書いた後に「理由＋感想」を書いたり、登場人物の行動に対して「自分ならこうする」といった意見を書いたりするようになった。

文の量や形式の変化に加え、使用される語彙の量も増えたことで、「書くこと」に関する能力の向上が児童に見られたのではないかと考えた。

(4)　日本語の読みに対する情意面の変化

情意面の変化に関しては、児童を対象とした「日本語を読むことに関するアンケート」への回答と、児童へのインタビューから分析した。

「日本語を読むことに関するアンケート」については、日本語、ポルトガル語、スペイン語、中国語、タガログ語で作成をした。それらを用いて、多読実践の前後にアンケートを採り、その結果を比較したところ、多読実践前に日本語を読むことに対して不安感を抱えていた児童の多くが、多読実践後にはその不安感が軽減されたと回答していた。また、児童へのインタビューからは、ほぼ全ての児童から多読実践前には日本語の本を全く読みたくなかったが、読むことが楽しくなったという回答を得ることができた。児童の中には、好きなシリーズを見つけ出

し、休憩時間中にもそのシリーズの本を読むようになった者もいた。
　これらのことから、日本語多読の実践により、児童が日本語の読むことに対して肯定的な印象をもつようになったと考えた。

(5)　多読用図書の難易度に関する基準の設定
　課題の申請時には、英語の多読用図書の難易度基準を参考にして児童用の日本語多読図書の難易度設定を行うことを考えていた。そして、平成 28 年度には日本語多読の先行研究や日本語能力試験出題基準語彙表を分析し、平成 29 年度には難易度基準として本の総文字数と使用表現や語彙を基に難易度を考え、難易度レベルによる本の分類と整備を試みた。
　そして、ある程度日本語で読書ができた数名の児童に難易度に関する感想を得たところ、文字数は気になるが表現や語彙については関係がないという意見を得た。そこで、平成 29 年度半ばから瀧(2010)に示されている各図書の推奨年齢でレベル分けをしたところ、児童は本が選びやすくなったと述べていた。
　英語の多読用図書や、先行実践のある大学生を対象とした日本語の多読用図書は、語彙や文字の数、使用されている文法項目等でレベルが分けられている。しかし、日本語指導を必要とする児童は、日常生活の中で言語の難易度を基準として日本語に触れるのではなく、意見や考えといった意味内容を伝え合うために日本語に触れているため、言語ベースで難易度を分けるよりも発達段階を意図したレベルを採用することがよいことが分かった。その際、絵本の出版社により推奨年齢の基準が異なるため、保育関連図書に示されている推奨年齢を参照するとよいと考えた。

(6)　多読用図書の選定と図書リストの作成
　課題の申請時には、日本語多読用図書として難易度が設定された市販図書は、NPO 多言語多読監修による『にほんご多読ブックス』シリーズ及び『レベル別日本語多読ライブラリー』シリーズのみであると思われた。これらの図書の難易度レベルは主に日本語能力試験のレベルを参考にしていたため、外国籍児童には語彙や表現、内容が難しいものが多いと思われた。また、NPO 多言語多読が多読に適した一般の市販図書約 170 シリーズを紹介していたが、これらの中から外国人児童の言語能力よりも低いレベルの図書を選ぶと、その数は更に少なくなってしまった。
　研究代表者らは、児童との会話から「桃太郎や一寸法師といった童謡を知らない」「日常よく使われる言葉を知らない」「擬音語に馴染みがない」という実態があることを把握していた。そして、日本で生まれ育った児童が、家族から読み聞かせをされた図書や発達の道筋の中でくり返し読んできた図書を、外国籍児童にも読ませる必要があるのではないかと考えた。そこで、幼児の発達段階別に推奨されている絵本を最初の教材として購入した。その後は、児童が読みたいと言ったジャンルの図書や、最初に購入した図書の中にあったシリーズの残りの図書、書店で好評となっている図書を購入していった。最終的に 449 冊の図書を教材として用いることとなり、最終的には瀧(2010)に示されている各図書の推奨年齢でレベル分けをし(表 1)、図書リストを作成した。
　各小学校における担当教員からは以下のような意見を得ており、課題はあるものの図書選定については上記のような方法で適切であったと考える。
○　絵本を教材としたことに関しては、本に興味を持たせる点と語彙や内容に関するイメージを持たせるという点においてよかった。
○　保育関連図書を参照して 2 歳児未満を対象とした図書を選んだことに関しては、簡単すぎるかもしれないが、児童の日本語を読むことに対する心理的なハードルを下げたり、たくさんの本を読むことができたという自信を持たせたりすることができた。
○　シリーズになっている図書は、それを好んで読み続ける児童もいるため揃えておくとよい。
○　昔話の絵本や少ない文で書かれた絵本をより多くするとよい。

表 1　多読用図書のレベルと冊数

難易度	レベル	推奨年齢	冊数
易	黄	2 歳未満	73 冊
	緑	2 歳 ― 3 歳未満	71冊
	青	3 歳 ― 4 歳未満	93冊
	赤	4 歳 ― 5 歳未満	80冊
難	白	5 歳以上	132冊

＜引用文献＞
① 粟野真紀子、川本かず子、松田緑、アスク出版、日本語教師のための多読授業入門、2012

② 熊田道子、鈴木美加、日本語教育における Extensive Reading(多読)の実践、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、41 号、2015、229-243
③ 瀧薫、エイデル研究所、保育と絵本　発達の道筋にそった絵本の選び方、2010

５．主な発表論文等
〔学会発表〕(計 2 件)
① 松井 千代、松井 孝彦、授業内 10 分多読の実践と担当教員の役割について、日本語教育学会 2018 年度秋季大会、2018 年
② 松井 孝彦、松井 千代、外国人児童に対する授業外・授業内多読指導の実践事例、日本語教育学会 2017 年度第 10 回支部集会関西支部、2018 年

〔その他〕
ホームページ等
http://je-tadoku.info/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：松井　千代
ローマ字氏名：(MATSUI, chiyo)
所属研究機関名：愛知淑徳大学
部局名：文学部教育学科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：50770038

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。